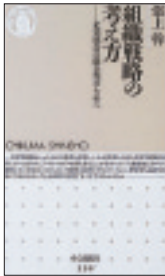


経営学の基本テキストはコレだ!



沼上 幹
『組織戦略の考え方
—企業経営の健全性の
ために』

■ちくま新書(2003年)
■価格756円(税込)

今井雅和

同書は教科書というよりは、エッセイ集といった方が適当かもしれない。前半部分は、官僚制や欲求階層説などを、よくある表面的な解説ではなく、経営学の研究蓄積を踏まえた奥深い議論によって、原点に戻って再考することの重要性を教えてくれる。後半部分では、「失われた10年」以降散見される企業組織の機能不全の分析と処方箋を、やや強い調子で提示している。ビジネスマンや公務員にも薦めたいし、学生諸君には経営と組織の面白さに触れるための副読本として読んで欲しい本である。

関根雅則

そもそも組織とは何であるのかについて考える機会を提供してくれる本です。組織には様々な形態が存在しますが、それぞれ一長一短があり普遍的な組織形態というのは存在しません。本書は、従業員がどのように行動すると組織が機能するのか、あるいは、逆に機能しないのかをわかりやすく示しています。おそらく大抵の人は何らかの組織に属していると思います。自分の所属する組織と照らし合わせながら読み進めると納得させられるところがたくさんあります。

藤本 哲

官僚制組織は悪い組織の典型だと一般的には思われている。しかし健全な官僚制組織は効率的な業務遂行と創造性発揮のために必要不可欠であると、この本は冒頭で述べる。「やるべきことを、きちんとやるのが難しいのだ」ということを時々見聞きする。流行の経営用語に飛びつくよりも、昔からいわれている基本的考え方や、自分自身の実感に素直に、愚直に取り組むのが正しいように思える。力強いつかみ、平易な表現で、一気に読める。



井原 久光
『テキスト経営学
[第3版] 基礎から
最新の理論まで』

■ミネルヴァ書房(2008年)
■価格3,360円(税込)

今井雅和

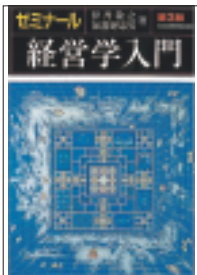
同書は経営学のデパートといえるかもしれない。経営理論の変遷と経営組織論を中心として、企業論、戦略論、さらには財務管理論等々、経営学の主要領域をほぼカバーしている。経営学関連の資格試験のテキストとして評価が高い理由も納得できる。経営学全般の知識の習得を目的とする、経営学の講義科目のテキストとして最適である。ただ、さらに知識を深めるためには、各領域(例えば、経営戦略論など)の専門書に当たる必要がある。

関根雅則

経営学の幅広い領域をカバーした本です。4編構成になっており、第1編では企業論、第2編では経営学説史、第3編では組織論、第4編では個別の経営理論(経営戦略論、マーケティング論、生産管理論、財務管理論など)を取り上げています。経営学の全体像や関連領域を把握するのに適した1冊といえるでしょう。また、多様な理論が登場しますので、大学において研究すべきテーマを発見する一助になると思います。ゼミの選択にも役立つのではないのでしょうか。

藤本 哲

経営学の授業の組み立て方として大まかに二種類ある。学問の発展段階を順に進んでいくのがいいのか、分野毎にやっていくのがいいのか、一概には決められない。この本はいいところ取りをしているな、というのが初めて読んだときの感想だった。バランスのとれた良い教科書だと言える。それだけではなく、理論や研究の結構詳しい紹介をしていて、理解の促進を助けている。個人的には理想の教科書に近いと思う。



伊丹 敬之・加護野 忠男
『ゼミナール経営学入門』第3版

■日本経済新聞社(2003年)
■価格3,150円(税込)

今井雅和

同書は経営学を環境と組織のマネジメントとして詳細な解説を行い、両者の矛盾への対応から企業の発展が促されるとして議論を展開している。組織の本質などの根本的な問題あり、酒屋のマネジメントなどの経営事例あり、内容が実に豊富である。「経営学」というよりは、企業の「経営」について、両著者の主張をふんだんに盛り込んだ、読み応えのある書物といえるかもしれない。じっくり考えながら読み進めてほしい文献である。

関根雅則

企業のマネジメントについて体系的な理解を深めるのに役立つ本です。「第1部 環境のマネジメント」、「第2部 組織のマネジメント」、「第3部 矛盾と発展のマネジメント」、「第4部 日本の企業と経営」という4部構成になっていますが、各部とも経営学の基本的なフレームワークや理論を前提に議論が展開されていますので、マネジメントに関わる幅広い知識を身につけることができます。ただし、分量が多いので読破するには根気が必要です。

藤本 哲

日本における、経営学・商学の二大研究拠点は、一橋大学商学部と神戸大学経営学部である。それぞれを名実ともに代表する経営学者二人が一緒に書いた経営学の教科書が本書である。経営学の教科書としては名実ともに最高峰だと言えるだろう。しかしこれ一冊でOKというものではない。様々な著者の様々な教科書や入門書を読んで頂きたい。分厚いので興味のある章から拾い読みするのもいい。



神原 清則
『経営学入門[上][下]』

■日経文庫(2002年)
■価格903円(税込)

今井雅和

同書は、上巻で経営学の中心である組織論と戦略論の基礎的な知識を整理し、下巻では、企業の成長、国際化、社内ベンチャー、研究開発の四点について両理論を統合しながら議論を進めている。二冊分とはいえ、新書ゆえの紙幅の制約にも関わらず、焦点を絞って、中身の濃い内容となっている。付録の経営学の変遷と文献紹介も、さらに勉強を進めようとする学生には、良いガイドとなる。経営学を志す新入生に一読を薦めたい良書である。

関根雅則

経営学の主要分野である組織論と戦略論を中心に据えてまとめられた本です。上巻と下巻に分かれています。上巻では、組織論と戦略論の基本概念や先行研究が紹介されています。下巻では、「企業成長」、「国際化」、「社内ベンチャー」、「研究開発」といった個別のテーマについて組織論と戦略論の観点から検討されています。初学者向けの入門書という位置づけですが、ある程度経営の知識を積んだ人にとっても十分読み応えのある内容になっています。

藤本 哲

上下二巻本の入門書である。上巻と下巻では特色が異なっている。上巻は経営組織論と経営戦略論についての入門的教科書であるが、戦略論については結構詳しく書いてある。下巻では、密接に関わっている戦略論と組織論について、いくつかのテーマを取り上げて解説している。日経文庫は文庫と銘打っているが実際は新書判である。日経文庫には多数の入門書があるので、他にどんなものがあるのか書店に見に行ってみよう。

【総評】

今井雅和

これら4冊の文献を、教科書として寸評してきたが、筆者が経営学を担当する教師であれば、講義用の教科書として井原(2000)を、プレゼミ(ゼミ開始前の準備のためのゼミ)の輪読用に榊原(2002)を、ゼミの輪読用に伊丹・加護野(1993)を、そして夏休みのゼミ合宿用に沼上(2003)を採用するであろう。いずれも、経営学と経営の面白さに触れることのできる良書である。

ところで、新入生諸君は教科書をどのようなものと考えているだろうか。最低限習得すべき知識を整理した書物で、習得後は廃棄すべきものだろうか。教師が授業のなかで、それに沿って解説するガイドラインであろうか。たとえ高校まではそうであっても、大学ではいずれの答えも否である。そもそも、大学に「教科書」は不要なのではないだろうか。

大学の授業で指定される経営学関連の教科書や参考書は、大学生のみならず、多くの場合ビジネスマンをも対象にしている。知識の伝授だけでなく、筆者の主張がさまざまな形で盛り込まれていることが多い。推薦された文献を十分に読み込んで、それぞれの本の価値を自分で判断するようにしてほしい。そして、卒業後も手許において、再読すべき本を見つけてほしい。

左／今井雅和教授
中央／関根雅則教授
右／藤本哲准教授

関根雅則

経営学は、企業をいかに存続、成長させるかを主要なテーマにしています。したがって、経営学の理論は、企業業績を維持あるいは向上させるためのノウハウということができるでしょう(すべてではありませんが…)。ただし、ノウハウといっても、多様な企業に通用するよう抽象度が高くなっています。つまり、個別の企業に対して具体的なかつ直接的にどう行動すればよいかを示す指針ではありません。結果として、「経営学の理論は実践では役に立たない」といわれることがあります。しかし、それは間違っています。抽象度の高い理論を実践においていかに応用するかが重要なのです。そこで、学生の皆さんには、経営学の理論を学ぶと同時に、それを応用する力を養って頂きたいと思います。そのためには、実存する企業の事例を研究することが必要です。今回は、経営学の入門書を4冊ほど紹介しましたが、ある程度基礎知識を身に付けたら、次の段階では数多くの事例に触れてみて下さい。

藤本 哲

大学の勉強をするときに授業で指定されている教科書だけを読んで分からないと思っていませんか。昔からある「読書百遍意自ずから通ず」という諺は、一面の真理を表していますが別の場合には間違っています。『Intro』の2004年版にも書きましたが、難しい本を読むで理解するためには、そのための予備知識が必要です。ですから難しい本を読まなければならない場合には、いきなり読み始めるのではなく、その分野の入門書や解説書から読み始めるのがいいのです。「急がば回れ」です。

シラバスを見よう。大学生協購買部の教科書売り場へ行こう。自分の履修する授業だけでなく、他の授業の教科書を手に取ってみよう。目次を見たり、中身をばらばらっと見よう。良さそうだと思うたら入手して自分の本棚に並べておこう。すぐに読む必要はない。何か分からない事が出てきたときに、関連するページを索引で探して読むだけでも随分違うものです。

